

This file is part of [HyperGeertz©WorldCatalogue\(HTM\)](#)

## Clifford Geertz

### **記念講演, (Fukuoka Commemorative Lecture)**

in: *The 3rd Fukuoka Asian Cultural Prizes 1992: commemorative lectures*, Fukuoka-City/JAP 1992: The Fukuoka Asian Cultural Prizes, pp. 24, 26, 28, 30, 32.

Fax by Uchino Tomiko, International Liaison, Secretariat of the Fukuoka Asian Culture Prize Committee; converted as HyperGeertz scan.

now also online source: [www.city.fukuoka.jp/asiaprize](http://www.city.fukuoka.jp/asiaprize);

---

Using this text is subject to the general [HyperGeertz-Copyright](#)-regulations based on the Austrian copyright-law ("Urheberrechtsgesetz 1936", version 2018, par. 40h, par. 42), which - in short - allow a personal, nonprofit & educational (all must apply) use of material stored in data bases, including a restricted redistribution of such material, if this is also for nonprofit purposes and restricted to a specific scientific community (both must apply), and if full and accurate attribution to the author, original source and date of publication, web location(s) or originating list(s) is given ("fair-use-restriction"). Any other use transgressing this restriction is subject to a direct agreement between a subsequent user and the holder of the original copyright(s) as indicated by the source(s). HyperGeertz@WorldCatalogue cannot be held responsible for any neglect of these regulations and will impose such a responsibility on any unlawful user.

Each copy of any part of a transmission of a HyperGeertz-Text must therefore contain this same copyright notice as it appears on the screen or printed page of such transmission, including any specific copyright notice as indicated above by the original copyright holder and/ or the previous online source(s).

---

## 記念講演

クリフォード・ギアツ

ご来賓の皆様。この巨大かつ歴史の深いアジア社会の一部である香港から、アメリカ人である私にこのような会をいただき、また本年の受賞者である皆さんの方々の情でお話をするという名譽をいただきまして、言葉に尽くせぬほど光榮に存じております。本当に、このような素晴らしいことがどうして起きたのか、これまでの人生に思いをめぐらさずにはいられません。第二次世界大戦までの幼少時代を過ごした、おそらく人口400人をもいカリフォルニア北部の小さな街から、50年後のこの日本南端の活気溢れる国際都市へと至るまでには、物理的だけでなく道か途い道のりがありました。このようなことがいつか起きるなどと、一休庵が想像してや予言などすることができたでしょうか。他でもない私自身が一歩促しています。ここまで私を運んできたものは、いろいろな意味で過去50年の激動の歴史の結晶であると思います。私たちは皆、少なからず、時代の荒し子なのです。ただ、私はその影響を少しばかり多く受けている方ではないかと思います。

当然、私は歩み寄ってくる戦争の影の中で青春時代を過ごしましたが、この戦争は、極に私たち西側の植民主義、自己満足、内向性を弱々に削いでしまいました。その相互に相対し合っているかに見える他の北地勇士は、日々近く弱しくなっていくようでした。振り返ってみると、その頃の私たちは、いずれの国か今知っている世界よりももっと複雑かつ困難で、只私に負けた世界で生きていかねばならないだろうと仄で感じていたのだと思います。そしてこのような予感、即ちな国々や森の中で心やすらかに平和に暮らしている私たちをどこか華やいだが気持ちにさせていました。国境時（その知らせは、近所の図書館で見えていたチャップリンの映画の録中に、スクリーンに映しだされました）15才だった私は、それから2年もしないうちに絶望へと入りました。そして太平洋を、熱念をがら日本に向かって、日本相手に戦うのだということ以外何も晴しいことを知らされぬまま籠絡していたところ、私の乗った艦の機関室が予定一週前に故障を遂げたのでした。そこで船首を向け直し、カリフォルニアへと戻り始めましたが、何かの向こうに行ってしまった感と——もはや自分は何一つの世界・社会・文化に属する者ではなくなってしまったのだという思いを非常に強くしました。その後退散するや、私はカリフォルニアを望めました。（その後、カリフォルニアにはほとんど戻ることはなく、戻るとしてもいつもアジアに行く途中に立ち寄る程度でした。）そして今度は戦士としてではなく学者として、私の住んでいた小さな世界に離れかかって来た、あの広大で多様な世界の探求をはじめたのです。

ハーバード大学で人類学を勉強しているうちに、直接具体的にその世界を探求するチャンスがやってきました。1951年のことです。フォード財団助成、ハーバード大学・マサチューセッツ工科大学の援助で学術団を編成し、ジャワとその周辺の小さな町や村で2年ほど調査をすることになったのです。インドネシアはちょうどその前年、正式に独立していました。このチームは、文化人類学者・社会学者・言語学者・歴史学

者などからなる3人の学際的グループで、同じく文化人兼学者である私の前妻も参加があってグループの一日として参加していました。私は宗教を研究することになっていましたが、ジャワの宗教とは、ヒンドゥー教、仏教、精霊崇拜、キリスト教、イスラム教が見事にそして互かに混じり合ったものでした。

私は、鉄道労働者の夫と良縁の妻、最近離婚して戻ってきた娘と彼女の赤ん坊という家族と共に、日勿れの村の竹の家で2年回を過ごし、その日常生活にすっかり引き込まれていきました。私達——私と妻——は結婚式に出席したり、出産や婚礼の儀式や葬式に立ち会ったり、口人屋や市場・商店・茶店などで走り回って酔いも酔いも、店らの考えていること、話していること、そしてようやく自由に口にするのできるようになった希望などについて語りあいました。太平洋の真中をゆっくりと航行していたあの数か月を除いて、この時が初めての海外でしたが、不思議なことに寄っていたよりもずっと違和感を感じませんでした。そして時が経つにつれ、それを感じることもなくなっていきました。彼らにとって、私はもちろん異質を存在であったわけですが、そのようなものとしての扱いを受けることはありませんでした。もちろん私は彼とは違いますが、子供でも分かるようなことに対しても鋭意に見えたでしょう。しかし、かと言って人因として全く偏見というわけでもない、何かしらそこに属する者として、地域社会の中に優しく包まれていました。東ジャワとカリフォルニア北部という二つの世界は、全く異なるという訳でもなく、40年にわたる私のアジア研究はうまくやり出しました。そして今も、こうして祖国にいる因もそれは続いています。このアジア研究は、あらゆる意味で私の人生や感性を形成しましたが、それを説明するのは今もって難しいことです。

とにかく、私はこの40年のあいだに何役もインドネシア——ジャワとその周辺の群島——に戻り、今お話ししたような研究を続けました。そのかたわら、韓国・台湾ではありますが、他のアジア諸国——中国・タイ・マレーシア・香港・シンガポール・フィリピンなども訪れました。（1984年に、ジャバ・ソサエティ知性人交流プログラムのジョン・D・ロックフェラー三世記念研究員として来日し、京都・大阪・山口そして徳島半島と、強念ながら九州まで来ることはできませんでしたが、一か月あまりを過ごしたことがあります。また、1950年ごろからは、インドネシアへの行き帰りに何度も立ち寄ったこともあります。）これらの旅歴は、民族の変化・イスラムの現実・民族国家の形成など、幅広い分野の著作に記すことができました。しかし私にとってそれよりも重要なのは、40年余りにわたって他の国の人々やその文化と深く密着に関わってきて（そしてそれに関して広く国際的な学識を得）、ようやく今、アジア文化とその研究について精進のいくゆえに至れた、ということです。

その第一の考えをあげますと、それは、同じ研究仲間であり、長年の友人でもある中根千枝氏やラウフィ・ク・アブドゥラ氏が昨年の第1回アジア文化賞記念講演会で強調されたことでもありますが、「アジア」というのはひとつの巨大な、

同質の存在でもなければ一均の思想・文化でもなく、ハイデッガーの言う、万物の「現存」、あるいはウイトゲンシュタインが生の「様式」と呼ぶところの、習慣・宗教・風俗習慣・道徳信念において、多種多様なものの集合体であるということです。

アジアの特殊な多様性は、私が留学で学んだインドネシア国内の多様性をあげるまでもないでしょう。チベットとスリランカ、朝鮮とカンボジア、インドと中国、インドネシアと日本、ミャンマーとフィリピン、マレーシアとタイ、シンガポールとヴェトナムを比べてみてもわかる通りです。しかしそれは不慣れに思ったり、拭き去ろうとすべきものでもありません。それは、むしろ賞賛され、さらに深められるべきもののなのです。若うということは、必ずしも対抗とか敵意とかを意味するわけではありません。互いに認識し理解さえすれば、深い友情と融合を生むことができますのです。学術的にであれ、政治的にであれ、アジアを一つの一般化した性質のものに結び付けてしまおうとすることは（最近、東アジアの動きに見られるように）、世界のどの地域においても決して平和や相互理解に結び付くことはなく、逆にあるがままに自らを受け止めてほしいという要求を深め、不平和や偏見、ひいては過激で暴力的な行為にさえつながってしまうのです。

アジアの文化は、他の文化同様、広く多様性をもっています。この創造的で素晴らしい祖国の遺産によって、さらに広範な人類の融合が実現されることを望むものですが、それは、多様性を賞賛・祝福しこそすれ、決して見せかけの共通性をもって減少させることの無い、この遺産のもつ広く深い「同質性」にもとづいて初めて可能になるものと思います。

第二の考えは、今述べた考えの延長であります。それは、アジア理解の最も効果的な方法は、比較することであるということです。ある特定の伝統に深く入り込んで研究するというのももちろん必要です。それはまた、広く他と比較しようとする際に、非常に有効な基盤となります。しかしアジアの「面」をたった一つの文化・歴史・国家という単純な枠の中で認識しようとしたならば、初めて創傷を加えることになってしまい、結局はその国自らの文化・歴史・国家の理解さえも不十分にしてしまうでしょう。ある特定の場所や時間を、別の場所や時間との比較の中で捉え、万物の現存や生の型式にも焦点を当てながら、並べて把握することによって初めて、アジアの多様性を三次元の視点でとらえることができるのです。まさに「シラーズのみを知るものは、シラーズを知らず」と有名な言葉にある通りです。

これは私にもアジアに販ったことでもありません。私の場合、1960年代中期、インドネシアで動乱が起ると研究が困難になった時期に北アフリカやモロッコに派遣を断りましたが、逆に、そうしなければ得ることのなかったアジア国を得ることができました。モロッコにしばらく行ったことで、ジャワやバリについてもっと多くを学びました。同じイスラムでも全く表現の異なるイスラムを見ることで、はるかにイスラムについて知ることができました。インドネシアのイスラムが内面的で思索的であるのとは比べ、モロッコのそれは、より直情で実用的だということも、ひとつのイスラムだけを見ていたのでは分からなかったことです。ある対象に近付くということは、簡単に言って、そこに深く入り込んでいくということなのです。



第三の考えですが、これは先に述べた二つの観点からの前線になります。それは成人して後の時間の半分を祖国から離れて過ごした私にとって大先輩に思えることなのですが、アジアに拘らず、どのような社会においても、その「あるいは他域社会を探索しようとする場合、他者に対して開放的でなければならないということです。日本には長い動向の歴史がありましたが、1968年に閉門し、1995年にはさらに急激な変化を迎えました。その中で、九州が外口ことにアジアの他の国々に対して好奇心を抱き、広い心で接してきたことが、今日のこの福岡アジア文化館にも象徴されています。もはやどんな「家」にとっても独立主義は合理的な政策ではありません。あの大陸・ロシアでさえ、今やっとそのことを大きな痛みをもって肌身に感じているのです。ましてその巨大な大陸の端に位置する日本にとって、独立などもはや想像すらできないことでしょう。

私の母国に関していえば、最も独立主義的で外口だった時期でさえ、かなり世界に開かれていたといえます。というのも、自発的にであれ強制的にであれ、あるいは希望を置いてにせよ絶望してにせよ、たまたま港の向こうから流入してくる移民で構成された国であるからです。しかし、そのような移民が作り出す多様性に常にうまく対応していたわけではないし、他国との関係においてもそれを効果的に活用してきたかという点、そうではないと思います。近年「立っている都市部での暴力や、その暴力の引き金となった人種差別は、そんな先進のほんの一部でしかありません。今では、中南米・アジア・アフリカ・中国からの移民の新しい波がアメリカ大陸に押し寄せ、米国の国内情勢・国際関係において非常に深刻すべき、あるいは致命的ともなる問題を発生しています。

比較的単一民族の韓国（とはいえ、おそらく口からそう言うほど、単一ではない）と、極めて口々種多な大陸の国（しかし、おそらくそれほどその事を認識していてもいず、またそれを事実として受入れてもいない）とは、正にその違いゆえに互いに何か与え合うものがあるはずです。それは、外からの影響の受けとめ方、外界の現実との関わり方であったりすると思います。どちらにしても、文化人類学という私の仕事は、人間同士の関係をより容易にし、密着し、ひいては福岡アジア文化館が目指しているものと広く関わっています。互いの違いを真摯にかつ敬意の念をもって受け止め、さらにその相互関係を大きなネットワークの中に紡いでいこうとする新しい「国際感覚は、私たち——学者、芸術家、文化人、政治家、ビジネスマン、労働者——が口内外において目指すべきゴールであるのです。

最後の日々の思い出は、私の学問が多様で広い対象を持つものだったためにこう感じるに至った訳ですが、停滞した創造的なアプローチすなわち人間を時代にそぐわない文化の類型や新り固まった「常識」・「社会観」・「世界観」のなかに押し込めようとする手法は、異なる生活を営むことにもそれを許容することにも導かず、人間理解に至らしめないということです。それはかえって作り話・偏見・固執に導き、他者を思考する者としてではなく、単に、操り、馬鹿にし、嘲し、脅すことのできる相手としか見ないある種の盲目に導くのです。しかし一方で、異質であることを賛賞することは、

下手をすると安易な類型化を招き、全ての人口・社会・文化に関する基本的な事実を見逃してしまうことになります。人類も社会も文化も、常に変化を続けるのですから。私たちは、慣習や歴史という牢籠にとらわれる必要はありません。必要が時に、必要をよに文化や歴史を理解すればよいのであって、まるで見えない糸糸の羅網にいる人のように、それにとらわれることはないのです。それよりも、文化や歴史といったものをダイナミックで私たちの暮らしの活力となるもの一未来の決定因ではなく、原因であると見るべきなのです。

南アジア・東南アジアにおける反植民地闘争・中国の文革・日本の震災と、多くの社会変革が広くそしてダイナミックに繰り広げられた時代に長くアジアで仕事をし続けている私にとっては「悠久不変のアジア」という考えは滑稽でしかありません。1961年に出会ったインドネシアは、その年、共和国としての独立を勝ち得ようと闘争し始めた切で、自らの大義・アイデンティティーを模索しているところでした。今日のインドネシアを見ると、東南アジアにとどまらず広く世界の中で見ても、自信に満ちた変革が国家になったとつくづく思います。そして、その余りに急激な変化のため、私などは永遠に定説に到達する希望を失ってしまいそうです。アジア研究は、アジア人がやろうと非アジア人がやろうと、新しい出来事が起きる度に、その新しい事実に対して柔軟で立派な態度を持っていなければなりません。過り一偏の考えや、お化けの思想にとらわれてはいけません。アジアの文化・社会の研究の醍醐味は、どのような態度を持っていても、すぐにそれを訂正・修正しなければならぬこと、そしてその変化のただ中に身を置いて、それに随順・解釈を加えて行くことにあります。かたくなな心の持ち主には向かない職業です。

私はこれまで、アジア理解に努め、それから得たものを他の人々に伝えようとしてきました。しかしそのやっと手にした理解も僅く一時的なもので、どんな分類化も抱きどんな学問も打ち砕かしてしまうほどアジアは複雑で奥深いものでした。そして自分がやっていることは結局はその表面を知るようなものであったということを知るに至った、ということをごのうなく幸運であったと思っています。そしてそれがわかるまでに人生の大半を費やすことが出来たことに、そうさせてくれたもの、それが何かはわからないけれども、そういうものに感謝したいと思います。

つまり、大切なのは結論ではなく、経験であると思います。アジアに生きる経験、アジアの言葉を話す経験、アジアの友人をもち、アジア人が怒れることを恐れ、アジア人が望むことを自分も望むことができたという経験です。自分の内面的生活を形作ってしまうような設備や仕事を持てるほど運のよい人はそれほど多くはないと思いますが、私の場合はその幸運を聞かれます。そのように恵まれていた上に、それに対してさらに賞をいただくということは、ただただ驚きのほかありません。心から感謝申し上げるとともに、この賞を単に私一人への表彰としてではなく、むしろは世界ことにアジアがもっともっと文化の豊穡を増やしていくことが出来るという期待と栄誉の表れとして、それを祝福したいと思います。

心より、深く名譽に感じます。どうもありがとうございました。